

# 美術における本のメタファー

中川素子

## The Metaphor of the Book in Art

Motoko Nakagawa

本は見る私たちの方に背表紙をむけ、三次元立体としてみえる。緑色っぽくみえる本は、実物通りで表題もはっきり読みとれるものの、妙に物質感がなく、はかない感じでもどかしい。ホログラムとはしょせん仮象であり、さわることもまして持つこともできない。この頃よくきくヴァーチャル・リアリティという言葉の意味と違い、ホログラムは見え方そのものがヴァーチャルなのだ。

マイケル・ウェンヨンは物理学と光学を学び、スーザン・ギャンプルは美術を学んだ。二人は1990年から2年間、筑波大学に招聘されていたが、この作品にある本はすべて筑波大学図書館のものである。2人は「文化と思想がごちゃまぜに折衷された<sup>(註14)</sup>」図書館を「観光客のように<sup>(註15)</sup>」回遊して楽しんだらしい。

「ビブリオグラフィ」でホログラムにとった本の題名、「光学の知識」、「美術と視覚」、「錯視と視覚美術」、「日本のハイテク戦略」、「遠鏡図説、三才窺管写真鏡図説」、「見えざるものの形」などを見ていると、彼らの興味や考え方がよくわかる。

私は展覧会場でウェンヨンに会い、英国に戻った彼らから資料を送ってもらったが、日本側の解説文の「テクノロジーの進歩により

変化の一途をたどる文字文化への警鐘<sup>(註16)</sup>」とか「テクノロジーの到来により変容する本という形態に対する作家の憂慮<sup>(註17)</sup>」という言葉と違い、彼らは本のテクノロジー化をもっと淡々と受けとめて、次のように書いている。

「私たちはまさに今、本というものの形が情報技術の出現と共に変容しはじめる時代にいるのかもしれませんが。たとえ本が今のままの形で残っていくにしても、その役割は問い直され、また新たな提案とその提示がなされる時期にいるのです<sup>(註18)</sup>」

そして「情報テクノロジーの進歩と共に変容して行くであろう本の存在について思索する時にも、またテクノロジーを使うというのは面白いことです<sup>(註19)</sup>」といい、マッキントッシュのコンピューターとワコムレーザー・プリンターを使って本と本棚を描いている。

彼らはサセックスのグリニッジ天文台にも招聘され、そこの図書館でニュートンの「光学」の初版本を見、文化や文明の象徴としての本に興味をもったという。「ビブリオグラフィ」の中の「Artistic Japan」という本を、「これは100年前に出版された本で、世田谷美術館での『ゴッホと日本展』にも出てましたよ。」と言った。その本（もちろん初版ではないが）が、大学図書館で、今年出版された本と同じように並んでいる！

「アーティストとして私たちは、本に見受けられるように、新しいものと古いもの、歴史的なものや現代的なものを結びつけることに興味があります。これは歴史と文化の中から自由にイメージやテーマを選び出すことができる芸術家についてのプロジェクトなのです<sup>(註20)</sup>。」と語る彼らは、今の本という形式に対し固執せず、自由な立場で考えているのだ。

14) ウェンヨン & ギャンプル レクチャー ワークショップ資料, P3, 1992

15) 同上

16) インスタレーションエイジ 空間と視覚, 東京都写真美術館, 15, 1992

17) 12に同じ 18) 同上 19) 同上 20) 同上